

図書館、私の理想

大牟禮佐弥子

図書館の仕事と聞いてまずイメージされるのは、カウンターで利用者に対応する司書の姿でしょう。カウンターでは貸出・返却以外にも、資料の取り寄せなどのサービスを提供しています。しかし、図書館の仕事はそれだけではありません。書架の整備にとまなう力仕事もあれば、学外展示会へ出展することもあり、実に多様なものです。私は今年の4月から本学図書館で働きはじめました。これまでは他館で主にカウンター業務に携わっており、現在、事務室で資料の管理に当たっています。今回はみなさんが本学図書館で本を手取るまでの工程を簡単にご紹介するとともに、図書館の仕事について個人的な所感を述べてみたいと思います。

図書館から発注される資料は、選書機構の構成員である教員や職員の選書以外にも、学生の希望によるもの、また、寄贈していただいたものがあります。毎月平均800冊の図書一冊一冊に、当館の蔵書印を押印し、資料IDを付与して登録します。そして十進分類法に基づき資料を分類する整理作業を経て、書架へ配架します。

蔵書印はその本が学校法人の資産であることを示します。資料IDはその本固有のもので、書誌データの検索などに欠かせません。どちらもとても重要なものです。一冊ずつ、もれなく処理することは地道な作業ではありますが、新しい本を手取るのは嬉しいものです。また先日は、1820年代に刊行された、古い資料が受け入れられました。歴史を持つ書物に出会えることにも、感慨があります。

本学図書館は外国語大学であるため、当然多くの言語の資料を所蔵しています。たとえばロシア語資料の場合、目録作業に際してキリル文字を理解しなければならないわけですが、それらはロシア語を専門に研究されている先生方に

担当していただいています。私は配属当初、自分に理解できない言語はどのように正確に分類すればいいのかと考えていました。しかし、実際には日本人の理解度の低い言語資料については、専門の知識を持つ人々の協力を得ることが必要なのです。

図書館ではこれらの作業が有機的に繋がって、カウンター業務が円滑に行えるのです。

さて、6月から、ニューヨーク公共図書館の舞台裏を記録したドキュメンタリー映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリス』（フレデリック・ワイズマン監督）が、京都でも上映されます。世界最高峰の「知の殿堂」と称されるこの図書館は、日本で思い描かれる図書館の役割をはるかに超え、市民の自立精神とアメリカの民主主義を支えるものと考えられています。実際に運営をする人たちは、どのように現在を見つめ、またどのような未来を予測し、図書館づくりをしているのでしょうか。

私の働く大学図書館と公共図書館の違い、そしてアメリカと日本という国民性や社会構造の異なりもありますが、図書館として共通しているものは利用者へのサービスの向上を求めなければならないことです。そのためには図書館を使い情報を求めたい利用者の気持ちを重視することです。私たち図書館員は、利用者を守るための倫理観を高め、科学としての図書館学や情報学に精通し、これを基盤としたサービスを展開する必要があります。

たとえばカウンター業務においては、利用者の気持ちを理解するために、ヒアリングの技術などを、経験を重ねながら身につけなくてはなりません。今日では図書館内の資料だけでなく、オンライン上の学術情報も日々更新されています。利用者がより早く資料を入手できる方法はないか、どのように案内すれば多くのデータベースを活用してもらえるのかなど、事例から学び、スタッフ間で情報共有してサービスの向上を目指しています。

さらに、利用者のみなさんにとっても図書館の利用経験が意義のあるものになる、そんな場をつくるのが理想ではないかと思うのです。

おおむれ さやこ（司書・非常勤職員）